

津山恵子の NY発 グローバル随想



Uber 急成長の陰で



イラスト・題字：長峯亜里

運転手の収入改善に向け

私が住むニューヨーク・クイーンズでは、ニューヨーク名物のタクシー「イエローキャブ」は営業していない。このため、空港に行く時など配車サービスアプリ「Uber」「Lyft」などは、なくてはならないものだ。

ニューヨーク市のビル・デブラシオ市長は8月14日、全米で初めて配車サービスアプリの運転手の数を暫定的に制限する法律に署名した。今後1年間、Uber、Lyft、Juno、Viaのアプリ4社は、新たに運転手を雇用してはならない。

法律は近年、Uberなどに収入を脅かされているタクシー運転手と、攻めるUberなどの運転手、双方の収入を改善するのが狙いだ。運転手の時給を最低17.22ドルにするが、それほど、タクシーだけでなくUber運転手らの生活さえ不安定だ。

業界の急成長に比べ低い報酬

ニューヨークの運転手間の競争は、Uberなどの台頭で熾烈なものになった。もともとタクシー運転手の数は全米一で、約1万4千人。これに加え、Uberなど4社の運転手は、2015年に1万2500人だったのが、18年7月現在8万人に上っている。タクシーしかなかった時代に比べ、現在

は6.7倍もの運転手がお客を取り合う。

元から営業していたタクシー運転手は、収入減による生活苦で今年前半に6人が自殺。そのたびにタクシー運転手がデモを行い、Uberなどの規制を訴えていた。

同市のニュースクール大学がまとめた調査によると、Uberなど4社は18年第1四半期で、1日約60万回の運転サービスをニューヨーク市で提供。年間のサービス回数は、16年が前年比で100%増、17年71%増と大幅に伸びた。

しかし、Uber運転手の生活が安定しているわけではない。友人のフォトグラファーが家賃を払うためにUber運転手になったが、ほとんど儲からず2カ月で撤退した。1日飲まず食わずで20時間乗り回し、売り上げはUberへの支払い、車のレンタル代やガソリン代が引かれると、ほとんど手元に残らないという。

Uber、Lyftを利用した際、運転手に話を聞くと、みな収入を増やすために苦勞している。ほとんどの運転手が2つか3つのアプリを併用し、お客が近くにいて早くつかまるアプリに応答して多くの客を乗せようとする。ある時はUber運転手としてお客をピックアップし、次はLyft運転手としてピックアップするという具合だ。このため、お客も乗る際に「Are you Uber now? (今はUberだよ?)」と聞いて、車のナンバー以外に自分が呼んだ車両なのか確認する。